我が侭女神の気まぐれ

壱岐　匡耶
（山﨑 芙紗子ゼミ）

1

――パン、パン！
古ぼけた神社の神殿の前で柏手を打つ音が鳴り響く。
「よし、今日も一日よろしくお願いします」
一人の青年が慣れた身のこなしで一礼する。
「では、また来ますね」と声をかけ隼人は神社を後にする。龍山学園大学二年生の天城隼人の一日はこの神社から始まる。
　神社の鳥居の前で一礼し下山する山道に向かうと帚を持ったおばあさんとすれ違う。
「あら、隼人君！　今日も朝からご苦労様。遠いのに偉いわね」
「おはようございます。朝にここに来ないと気が引き締まらないっスよ。おばさんこそ毎朝掃除ご苦労様です！」
「私も習慣になっちゃって体が勝手にね。それにずっと見守って下さっていた神様を粗末にしちゃうと罰が当たるしね」
優しい笑顔を神社の方向へ向ける。

　神社は「貴布音神社」といい龍山市にある「龍山」という市の名前にもなっている山の中にある神社である。古くから農業、雨を司る神として祭られている。水龍の神「タカオカミノカミ」を祭神としている。高龗神と漢字では書き「龗＝水神」を表す。またこの高龗神は闇龗神（クラオカミノカミ）と呼ばれる神と同一神ともいわれている。そのせいか神社の神殿や手水場には蛇や龍の彫刻や絵が多々見受けられる。神社の規模は大きく、京都にある神社にも引けを取らない豪勢な神殿。山奥には禁足地である「鳴神の滝」があるなど立派な神社なのだが、数年前から常駐する神主さんが居なくなり少し寂しい佇まいをしているように思えた。「無人神社」になってから、こういった町の人達によるボランティアでまだ神社の綺麗な状態が保たれている。
「隼人君が都会から毎朝わざわざ来てくれて、神様も喜んでいらっしゃるわよ」
「そうだといいんですけどね。何かここの神社って惹かれるっていうかなんて言うか……言葉では言い表せないんですけど、大好きです！」
「ふふ、そう言ってくれるのは私も何だか嬉しいわ」
ふと、腕時計を見ると大学の講義時間が迫っていた。
「あっ、時間ヤベ！　授業始まる！　すみません、失礼しますね」
隼人はすぐさま山道を下る。
「あらあら、いってらっしゃい」
「いってきま～す！」

2

　龍山学園大学の教室に着くと時計は講義開始三分前を指していた。
まだ先生の姿は無く生徒たちは散らばり雑談で教室はザワついていた。
「ふ～間に合った間に合った」
「よ！　隼人。ギリギリに来ておまえらしくないじゃん？」
隼人が教室テーブルで伏せていると、いかにもチャラいです的な、でもどこかイケメンな生徒が隼人に声をかける。
「まぁ、たいした事はねぇよ。旭は今日授業出んだな？」
「いやいや、出ねえ出ねえ。桑山の授業クソつまんねぇし出欠確認したらおさらばよ」と満面の笑みを浮かべてバックれ発言をしている青年の

名は西田旭。隼人とは同じゼミメイトであり、大学の中では一番交流がある人物である。旭はコミュ力Maxなやつで大学でどの学部学年にもその名は響き渡ってるという。
「でもさぁ、龍山市（ここ）バックれてもあんましやることねぇんだよな。最近駅前におっきいショッピングセンターできてマシにはなったけどさ。マジ理想の『学生生活』ぶち壊しにきてるよな」
　龍山学園大学のある龍山市は「田舎町」否、「ド田舎町」である。龍山という山をはじめ山に囲まれた地域で、どこを見ても田んぼや畑。そのバックは雑木林に囲まれており、まさに田舎生活を満喫するにはもってこいな町なのである。
　そんな町も四十年前に龍山学園大学ができたことを皮切りに学生のための住居が数多く建てられ過疎を止めるべく「ベットタウン化計画」として駅前周辺も発展、脱田舎町を目指しているそうだ。確かに町は活性化してきたのだが、大学生がタムろできる娯楽施設は無く不満の声は多く聞こえた。ここから遊びに行くには都市部である天海市に電車で向かうしかないのだ。
旭も下宿生でありそういった不満組の一人なのである。
「まぁ、でも最近は駅前辺りは店とか増えてきたじゃん？今月もファミレスとかできたみたいだし」
「そうだな、マシにはなったぜマシには。そのファミレス花村のやつと行ったんだけどさ、あいつ感動しちゃって笑えたわ。ただのファミレスで騒ぐなっつうの。でもさ都会暮らしのお前は良いよな。ここには娯楽がねぇんだよ娯楽が」
「学校遠いし羨ましがられることは無いって。逆にこっちに下宿したいぐらいなんだけど。田舎って良いじゃん」
「んなことねぇよ！　田舎好きとかお前変わってるよな。まだあの趣味続けてんの？」
「講義終わりで暇な時はね。田舎探索色々発見あるし面白いよ」
　隼人は都会である天海市に住むシティーボーイであり、昔から田舎に対する憧れが強かった。大学入学後は講義が終われば龍山市を探索、色々な場所を見たり地域の人と交流するのが趣味になっていた。一年のとき『貴布音神社』を見つけたのもこの探索の賜物であった。
「この間もさ、めっちゃでかい蟷螂見つけてさ」
「はいはい分かった分かった。小ボーかよ、ったく、この話すんじゃなかったぜ」
ギラギラと少年のような光る目をして話す隼人に旭は苦笑いを向け話を終わらせる。
「あ、そうそう思い出したんだけどさ。肝試し行かね？」
と旭は何か思い出したかのかように提案する
「え？」
隼人が詳細を聞こうとすると講義の先生が教室に入ってくる。
「遅れてすみません！　出欠用紙を教壇横の机に置いておきますので取りにきて下さい」
「っち、先公来ちまったか。詳しい話はまた昼休みに食堂でしようぜ？俺はバックれる！　ちょっと彼女と待ち合わせしてるんだよな」
といって、教壇近くにある出欠用紙を取り名前を書いて隼人に押し付ける。
「そんな訳でこれ頼むわ！　ノートも後で写させてくれ、下さい。」
「はいはい、分かったから行くならさっさと消えろ」
「あざーっす！　じゃまた後で！」
というと旭は教室からGの如く素早く消えていったのだった。
　旭は、見た目とか言動はチャラいかもしれないが、どこか憎めないやつだ。
隼人の大学生活の中では、少ない「友人」と思える存在なのである。
　講義が終わり昼休みが始まる。旭との約束のため隼人は食堂へと向かう。
教室がある棟から食堂がある練へと続く廊下に差し掛かると　一人の女性が周囲の視線を集めちょっとした騒動になっていた。
「おい、あれ見ろよ！　あれが噂の都城らしいぜ」
「マジかよ、美人過ぎんだろ」
スタイルは誰が見てもお世辞抜きでバツグンで、どこかミステリアスな

雰囲気を醸し出していて美人度を更に引き上げていた。彼女の名前は都城遥。その容貌もさることながら学力も主席クラスという噂である。常に一人で行動しており誰も寄せ付けないオーラを放っていた。まさに高嶺の花を表したかのような人物である。

そんな彼女は、群衆にも見向きも応えもしないで図書館のある棟へと向かっていった。隼人も少しの間見蕩れていたが、約束を思い出し食堂へと足を早める。

3

隼人が食堂に到着するとすぐに窓側の席に旭と、例の彼女であろう姿を見つけることができた。旭と同じ時間割で出会う時はこの席で昼食を取る事が習慣になっていた。

「わりぃ、遅れちまって」

「いやいいんだよ、こっちこそありがとな。授業の厄介ごと押し付けちまって」

「大丈夫、ちゃんと提出しておいたし、あとこれ。写したら返してくれよ」

ノートを旭に差し出すと手を合わせ拝むようなポーズをしてみせる。

「ありがてぇ。ホント隼人様々でございます。あ、そうそう俺の隣に居んの彼女な。ほらお前も迷惑かけたんだから礼言っとけ」

旭に促されずっとケータイを触って黙り込んでいた旭の彼女が隼人の方へ視線を向ける。

「私ぃ～清水啓子って言いますぅ～旭のパシリの隼人君だっけ？ありがとぉ～」

金髪で濃いメイク、如何にもギャルって感じの清水は微塵にも感謝の気持ちが感じられないだるそうな口調で隼人にお礼を述べる。

「おい！　流石にちゃんとしろよ。お前が電車乗り遅れたから俺を迎えに来させたんだろ？　それで隼人にも迷惑掛かってんの分かってんの？

それに隼人はパシリじゃねぇよ」

旭の怒鳴り声が食堂中に響き渡る。

「ま、まぁ大丈夫大丈夫！　ちゃんとお礼聞いたし気にしてないから！旭もそこまでにしよ？　それよりさ、さっきの話の続き聞きたいんだけど」

旭と、怒鳴られてムッとする清水との一触即発の空気を感じた隼人は、話題を本題へと変える。

「おう、隼人が良いならいいんだけどさ」

腑に落ちない様子の旭だったが、例の肝試しについて説明し始める。

「実はさ、最近ウワサになってる心霊スポットっていうのがあるんだよ。龍山近くに『竜美池』っていう池があるらしくてさぁ。そこでデルらしいんだよね。そこがさ、名前の通り綺麗な場所らしいんだけど池の前で『綺麗』とか『美しい』とかそういう言葉はタブーな場所らしいぜ。聞いた話じゃ言った瞬間に気温が下がったように寒くなったり、少女の幽霊を見たり。あ、龍を見たことあるって言うのも聞いたことあるけど心霊じゃなくねって笑っちゃうよな」

さっきの怒り顔から一転、旭は楽しそうな顔で話を続ける。

「まぁ、とりあえずさ。ありきたりな心霊のウワサだけど肝試しするにはもってこいの場所ってことなんだよ」

「う～ん、確かにありきたりな話だね。興味はあるけど」

「だろ！　じゃあさ今日行こうぜ今日！　待ちきれなくて……あぁぁ！メシ貰いに行くの忘れてたぜ。悪りぃ食券そのまま放置してたわ、取りに行ってくるっ！」

旭は大急ぎで食堂のカウンターに向かう。結構時間が経ったようで食堂のおばちゃんに怒られている。旭が席から離れるとずっと黙り込んでいた啓子がまたスマホから隼人に視線を向け、

「あのさぁ～言いにくいんだけど、この話隼人君は断ってくれたらマジ嬉しいんだけど～」

「え？」

「マジ空気読めよ！　私が二人きりで行きたいって言うの察してくんないかな？」

あぁ、なんて残念な子だろと改めて隼人は思うが、確かに彼氏彼女でそういうスポットは行きたいものなのだろうと納得する。

「う、うん。分かったよ」

「流石隼人君～ありがとぉ～」

そう二人で話していると旭がラーメンの入った丼を持って帰ってきた。
「悪りぃ悪りぃ話の途中でさ、食堂のおばちゃんに怒られちった。冷めちまってるしよ」
旭は、はぁ～とため息をつき席に座るとスマホを取り出しながら話を続ける。
「で、今日どうなんだよ？他のやつには返事待ちなんだけどさ。こいつは来るの確定なんだけどな」
旭はスマホから清水の方に視線を向ける。
「ああそういえばごめん！　今日先約あるの忘れてたわ」
「マジかよ、他の奴にも連絡もう入れちゃってるし日程変えづらいな……」
残念そうな顔をする旭に隼人は罪悪感を覚えるが、ついてしまった嘘は貫き通すしかない。
「まあ、俺抜きで楽しんでこいよ。せっかくの機会だしよ」
「お前がそこまで言うのなら……今回は仕方ねぇけど次はマジで怖いとこ探しとくから覚悟しとけよ！」
「おう、期待してるわ」
やっぱり旭（こいつ）は俺の大切な親友だと隼人は再認識したのであった。

4

「足下気ぃつけろよ！」
日も落ち辺りは街灯一つもなく、聞こえてくる音は虫の鳴く声と風の音のみ。地面は泥濘んでおり普段人が立ち入った形跡がない道無き道を二つの灯りがゆらゆらと動く。
「もぉ～まだぁ？こんなしんどいとか聞いてないんだけどぉ～」
「ったく、可愛げのないやつだな。嘘でもいいから驚いて俺に密着でもしてこいよ」
「うん、そういうのいいから」
「素に戻った⁉こわっ」
月明かりとスマートフォンの懐中電灯アプリだけを頼りに、ウワサの心霊スポットに向かう旭とその彼女の啓子は、いつもと変わらないテンションでこの雰囲気を楽しんでいた。結局、旭の唐突なこの心霊スポット参拝企画はメンバーが集まらず二人きりになってしまい、最初はテンションがだだ下がりであった旭たちであったが、いざ探索してみると旭の方は冒険心が燻り、これはこれでありなんじゃないかと思えてきた。彼女の方は思っていたより何もない場所で、何も起こらない事からテンションは下がる一方であった。
「もうちょっとだから我慢しろって！　ここまで来て引き返さねえぞ」
「えぇぇ、もういいじゃん～もう足動かないよぉ～」
「だから、もうちょっ……お！着いたぞ！」
歩いて一時間弱。雑草をかき分けるとその目的の池が見えた。月が池に映し出され、ススキが風で舞うかのように優雅に揺れていた。竜美池はウワサ通り美しい池で旭たちも見蕩れる。
「本当にきれ……危っねぇぇ禁句言っちまうとこだったぜ」
「え、言わないのぉ？ってか、マジでそういうの信じちゃう人だったんだぁ～」
旭が禁句を言わない様子を見て啓子が旭を指さしながら爆笑する。
「し、信じてねぇし‼」
「っぷ！アハハハ‼　何ムキになってんの？じゃあ私が試してあげるねぇ～アハハハ」
笑いのツボにはまった啓子は目頭を拭いつつ更に池に近づく。
「綺麗！　私ってホント美しすぎて困っちゃうわ！　アハハハ」
まだツボにハマっているらしく笑い混じりで禁句を啓子は連呼する。
「ねぇ～何にもないでしょ？　分かったらぁ～もう少し男らしくなるこ……あれ？なんか冷え込んできたぁ？」
今は6月で初夏である。だが旭たちの口からは白い息が出始めた。
「どうなってるんだこれ！　ヤバいよ、マジで心霊いたんだって‼」
さっきまで余裕をこいて笑っていた啓子は恐怖心からかしゃがみ込んで震え、動けなくなっていた。
「おい、啓子！　ささっと帰んぞ！　シャレになんねぇって」
「う、動けないよぉ～助けてぇ……」

旭が啓子の元へと近づこうとすると彼女はどんどんと池の方へと向かって行く、いや引っ張られているという表現が正しいだろう。明らかに自分の意思ではない池の方向へと引きずり込まれていた。
「啓子ぉ!!!」
旭が啓子の手を握った頃にはもう池水に足をつけている状況で、まだ謎の力による引きずり込みは続く。
「きゃぁぁぁ!!」
啓子自身も抵抗を続けているようだったが、謎の力の強さは半端ではないようで、叫んでいるのが精一杯のようだった。助けなど来ない田舎の人気のない池で、旭は絶望を感じざるを得なかった。
　ふと視線を背後に感じて振り返ると、赤い着物を着た少女が赤い装飾品がたくさん付いた傘をさしてじーっと旭達を見つめていた。
「貴方達はこの地で犯してならない掟をやぶってしまったの」
少女の声は綺麗で、まるでガラス細工のように壊れてしまいそうな儚い印象を旭に与えた。
「お、お、おきてだって?」
「そう、この地で言ってはならない事を貴方たちは言ってしまったの。お陰でアノ方がとてもお怒りで困っているのです」
「え、え?言ってる意味が」
「私たちも穏便にしたいのよ?本当に。なので貴方に生きるか死ぬかの選択肢を与えましょう」
旭はこの少女が言っている意味が飲み込めず、ただただ唖然とするしかなかった。
「見せしめって訳じゃないんだけれど……この女性には贄になってもらいましょうか」
そういうと少女は装飾品がいっぱい付いた傘を手でクルクルと回し始めた。すると旭が握っていた啓子の手が急に振りほどかれたと思うと、彼女は叫び声一つあげることなく池の中へと完全に引きずり込まれていったのだった。
「……え?助けるって言って……」
あまりの一瞬の出来事で旭は頭が真っ白になる。
「あの女性は何度も掟を破ってしまったの。助かるなんて思っていたのかしら?あくまでただ傍に居て止めなかった罪を犯した貴方に、選択肢を与えてあげてるの」
悲しみの感傷に浸る余裕も旭に与えず、少女は続ける。
「貴方にはやって欲しい事があるの。あの女性のようになりたくないのなら従って下さるかしら?」

　大学からの帰り道、隼人は電車に揺られながら窓の外を眺めていると、外はもう暗く月の光が瞬いていた。景色は田舎の風景から高層ビルが立ち並ぶ都市部に変わり、隼人は内心少し後悔する。
「……やっぱり行きたかったな、今頃みんな楽しんでいるのかな」
溜め息をついた頃には、電車は隼人の地元である天海市に到着していた。自宅からの通いで、大学まで一時間以上かかるこの街の駅を出ると、龍山の町とは違い喧騒が絶えない。空気もどことなく煙たく感じられる。良くも悪くも昼間を田舎町で過ごすようになってから、地元でありながら都会であるこの場所が隼人は嫌いになっていた。冷たくただ機械のように生きて行く人々が住むこの街が。
　空には、星は無くとも龍山市と同じように綺麗な満月が輝いていた。

5

　朝起きると見慣れた景色、名前がテレビに映し出されていた。
「昨日の午後、知人の通報により大学生清水啓子さんの水死体が発見されました。現場は竜美池というため池で心霊スポットとして噂になっており、足を滑らせて溺死したものとみて県警は捜査を進めております」
ニュースキャスターの報道が終わり、隼人は放心状態になった。それを不審に思った母が声をかけたのにも気づかない。仲は良くなかったとはいえ、昨日まで一緒に話していた人が死んでしまうなんて、現実のようには思えなかった。ただただ旭にはどんな顔をしてどんな言葉を掛ければいいのか思いもつかなかった。
朝食を済ませると隼人は大学へ向かう準備をする。
「……今、一番悲しんでるのはアイツじゃん。俺がヘコんでたら意味分

かんねぇよな」
鏡の前で笑顔を作って自身に言い聞かせ、大学へと向かう。
大学の最寄り駅に着くと、大学がある日は欠かさず参拝している貴布音神社に寄ることにした。というか、こんな日だからこそ毎日と同じように行動しようと隼人は思い山道を上り鳥居をくぐって境内に入る。
すると、看板に『立入禁止』と書かれ、しめ縄が張られた禁足地の前に、太陽の光に照らされて青く輝くものが落ちていた。
「うん？なんだこれ。昨日はこんなものなかったんだけどな」
二十センチほどの何か欠けたガラス破片のような蒼い物体であった。
「ったく、誰だよ、境内にゴミを捨てる罰当たりな奴は」
隼人はケガをしないように持っていたティッシュで破片をぐるぐると巻きゴミ箱を探すが、神社や山道にはゴミ箱がないことを思い出し、参拝を済ませ大学まで持ち帰ることにした。
大学に到着すると、どこもかしこも学生たちがニュースの話題で話し込んでいた。一番多いのは実は心霊の仕業じゃないかと面白半分に話していた。中には昨日の旭と啓子の食堂での痴話ゲンカを見ていた学生から流れた噂がもとで、
「実は旭が殺したんじゃないか」
とか、大学中はちょっとした祭りのように盛り上がっていた。
隼人は友人の悪い噂ばかり聞いて、いい気分には勿論なれなかったし、今まで何度もサボっていていつもなら居ない方が普通の旭だが、今日に限っては講義に一向に姿を現さないことを心配した。
……ジリリリ、ジリリリ
ポケットの中のスマートフォンのバイブがあり確認してみると旭からメールが来ていた。
『わりぃ、今日警察の調書とか書くみたいだからさ、授業出れねぇしまたノートとか頼むわ！　俺の事は心配すんな！　大丈夫だから（笑）』
メールでは向こうの心情などはハッキリと分からないが、いつもの感じの軽口を書いたメールを見て隼人は少し安堵した。
事件があっても休講などはなく講義は滞りなく進み、昼休みの時間になった。
「アイツ居ないし、今日は一人メシか、さみしー」
やはりいつも一緒に食べているやつと一緒に過ごせないのは少し寂しかったが仕方ない。いつもより重い足取りで、教室から出ると、
「ちょっと、待ちなさい！」
少し低めの女性の声に呼び止められ振り向くと、
「み、都城……さん⁉」
学園のマドンナに呼び止められたのだった。

6

あろうことか今大学の中でも屈指の美女とされている都城さんと隼人は二人きりの誰もいない教室で向かい合って座っていた。
「単刀直入に言うで？その〝力〟どうしたん？」
「え……〝力〟って言われましても」
隼人は、元帰宅部で鍛えなどしたこともない上腕二頭筋を都城に見せた。
「……ふざける気？」
すぐさま冷たい眼光が飛び、隼人はあわてて腕を引っ込めた。
「『力』っていわれても何の事だか全く分からないんですが」
「あぁ、天城君には意識無いってことは……今日何か変なもんとか拾ったことない？」
「変なもの？ですか、そういえば蒼いガラスみたいなものは拾いましたけど」
鞄の中から今日神社で落ちていたガラスの破片のようなものを出して都城に見せる。
「って、ええ‼　これ〝魂神具〟やん！　しかも割れてるし！　アンタ何してるんや！」
「え、えええ！　違いますよ。始めからその状態で神社に落ちていたんですよ」
「神具が割れてた？道理で昨日からここら辺一体変なもんうろつくようになったなとは思ったけど、誰の仕業やろ。妖怪では神域には入れんやろうし……」
話の内容がついていけないプラス、都城の実は関西弁キャラという意外

性で、隼人の頭はパンクしそうな状態であった。
「ごめんごめん、素人の天城君にこんな話してもしょうがなかったやんな。ってか同い年やろ？敬語やめいや」
普段はクールビューティ的な感じなのに、こう苦笑いで謝る都城の姿に隼人はドキドキしてしまった。これがギャップ萌えなのだろうと隼人は確信した。
「そ、そうですか。じゃあ改めて……。で、その蒼いガラスの破片って何なんだ？」
「神具っていうのは、普通よくお供えとかする祭壇とかにあるやろ。それは聞いたことあると思うんやけど……〝魂神具〟はそんやんよりスゴいもんで……まぁ言うたら神様の力の源みたいなものやんよ」
「力の源？」
「そう、だから神具がない神様はただの人、って言うとちょっと言い過ぎやけど、神通力を使えへんようになってしまう、つまり神様の持ってる力を使えなくなっちゃうんよ」
都城はまじまじとその〝魂神具〟の破片だというものを見つめていた。その姿は宝石に興味を持って目を輝かせている無垢な少女のようであった。
「私、ホンマもんの〝魂神具〟とか見たことなかってんけど、ホンマにスゴいな、こんなちっさいのに人では作り出せん霊力、出しまくれるんやな」
「都城って何者なんだ？」
「私？ふふふ、〝妖怪ハンター〟なんやで。ちょっと家の事情で霊とか妖怪とかを成仏させたり封印したりしてんねん」
「ゆ、幽霊？妖怪!?ハンターってマジかよ」
「嘘くさいとか思ったやろ？当然ちゃ当然やねんけどね。こんなことしてる人がおるとか知らんでホンマは誰も知らんで幸せに生きて行けるんが一番ええことやし」
都城はそういうと、どこか悲しげな表情で遠くを見つめ黙ってしまった。暫くの沈黙。気まずい空気が流れる。隼人もなんと声をかければいいのか、言葉を頭の中で模索するが、現実世界ではありえないようなことを聞かされて混乱していた。
「あ、ごめん。初対面の天城君に余計なことまで話してもうたな、巻き込んだみたいになってるし。ってか最初の方も悪いことしてしもうた。もの凄い霊力を大学で感じたもんやから関係のない天城君を疑って。もうここまでにしとこか？これ以上、天城君を巻き込む訳には……」
沈黙に堪えきれず都城が謝辞を述べる。
「大丈夫気にしないで。乗りかかった船じゃないか！　最後まで協力させて欲しいんだ」
「変わってんな君って」
はじめて笑顔の都城。こんな笑顔で接されて誰が引き下がれようか。
「っていうかさ、何でこんな大事なものが欠けて神社に落ちていたんだろ？」
「うん、私も気になってたんやけどこれでようやく見えてきたわ。実は最近この龍山市で妖怪が異常に現れているの」
隼人にとってはまだ信じがたい怪異の存在ではあったが、都城がここまできて冗談をいう人物だとは思っていない。本当に妖怪が現実世界に存在しているのだ。
「妖怪……まだ大学では噂になったりは……。いや今日の事件ももしかしたら妖怪の仕業なんじゃないかな？」
「鋭いな、実はあの池には二百年ほど昔に大妖怪を封印したっていう記録が残されているんよ。まだ調査中やねんけど、最近池からとてつもない霊力が溢れ出ててんねん。ここら一体も普段は大人しいはずの妖怪とか暴れ回ってたりしてるし」
「暴れ回ってるって大丈夫なん？」
「まぁ私が被害出る前に封印したりしてるし被害者はゼロやってんで！昨日まではやけど……」
啓子が死んだことに都城は責任を感じているようだ。少しまた表情が暗くなる。
「それは都城のせいじゃないだろ。気にするなよ」
「ごめんな。何か謝ってばっかりや」
都城の目には涙がたまっていて今にも泣きそうになっていた。

「お、おい。その……なんだ女の子に泣かれるとどうしたらいいか分からんから……その……くそ‼　言葉が出てこねえ!!!!」
「ふふふ、ありがと。ホンマに天城君って優しいねんな」
隼人が言葉がなかなか出てこずテンパっているとまたあの破壊力バツグンの笑顔が向けられた。
「じゃまた話戻すな?でここら一体この妖怪たちを抑えてたんが貴布音神社の神様やってん。でもここにこの〝魂神具〟があって、しかも欠けてるときたらそりゃ封印も解けるわ。まだ完璧やないみたいやけど、池にはヤバいくらい大きい霊力が溜まってるみたいや」
「う～ん、なるほど。ちょっと聞きたいんだけど、ここまで聞いておいてなんなんだけど俺にできることってあるのか?」
「ええっと……うん、無いかも」
隼人は妖怪の「よ」の字も分からない一般ピーポーで、何ができるかなど目に見えていた。だが、ここで引き下がっては男が廃る！
「じ、じゃあ、せめてこれを返しにいくことはさせてくれ」
〝魂神具〟の欠片を隼人は指さし必死に役割を探す。
「あかん！　これ返しにいくってことは神様と会うかもってこと分かってる?怒らせてしまったら力がないとはいえ只ではすまんで！」
都城は声を荒げ反対する。
「任せてくれ！　それにこれは俺が持っていたものだ。都城に手を焼かせるわけにはいかねえよ」
「え、でも……」
精一杯の強がり。本当は怖くて怖くて仕方が無い。手が震えて仕方が無い。
「いや、行かせてくれ。大丈夫だ。毎日あの神社には通っててよ、流石に熱心な信仰者に死ねとまでは言わないだろうさ」
「じゃあ、お願いしま……」
キ～コンカ～ンコン。
昼休み終了のチャイムが鳴る。
「あ、昼飯が」
「ホンマごめん」

7

講義が終わり、旭から連絡はなく少し心配にはなったが、今は教室を抜け出すと隼人はダッシュで神社に向かう。あのあと、都城からは〝魂神具〟を返す祠の場所を聞き、何度も失礼が無いようにするのよ！　と子供を送り出す母親のように注意をもらった。都城は例の大妖怪の情報を収集するため調査に向かった。
龍山の山道を登り貴布音神社に到着する。いつも来ている場所のはずなのになぜか緊張して仕方がない。
「ふ、大丈夫大丈夫！」
自分自身に言い聞かせ、「立入禁止」の看板としめ縄が守る禁足地に一礼し、しめ縄を跨ぐ。都城によれば祠の場所は「鳴神の滝」にあるらしい。入っては行けない場所に入るという罪悪感を胸に神域の奥へと足を進める。禁足地の中はジャングルのように木々が生い茂っており、僅かな轍に沿い進んでいく。二十分ほど歩くと遠くの方から滝の音が聞こえてきた。更に木々をかき分け奥へ向かうと大きな滝が見えた。
滝の周りは美しい苔。木々が萌え、滝を落ちてきた水で虹がかかって幻想的な風景である。見蕩れていると、今にも壊れそうなボロボロの小さな祠が滝の傍に建っていた。
「あの祠に置いておけばいいのかな」
隼人は祠に近づいてみると、中には御弊をはじめ多くの装飾品があったが玉を乗せるだろう台座には何も無い状態であった。とりあえず、破片をその台座の上に置こうとすると、
「貴様かぁ！　私の神具を奪った愚か者は！」
色っぽい大人の女性の怒鳴り声が隼人の背後から聞こえる。
「おぉ！　それは紛れも無く私の神具ではないか。粉々になってしもうて、どう落とし前をつけてくれるのかえ?」
その瞬間、周りに水の壁が出現し隼人を取り囲む。
「い、いえ、違うんです！　話を‼」
「言い訳無用！　とりゃぁぁー‼」

8

「そうか、それなら早よ理由言えばよいものを、おほほ～」
「そうですよね、神様の飛び蹴りなんて一生の宝ですよ」
顔面についた蹴り跡をさする。あのあとなんとか宥めて今までの経緯を神様には話すことには成功し、やっとのことで話し合いのできている状況だ。
「よく見れば、毎朝熱心にここに来ている者ではないか苦しゅうないぞ」
「こんな神（ひと）に俺は毎朝参拝してたのかよ」
「うん？何か言ったかえ？」
「いえいえ、いつもありがとうございます！」
この女神である「タカオカミノカミ」は水龍の神と聞いていたので意外に思った。でも実際に神通力を見たから信じるしか無い。その姿は黒髪ロングで紫色の着物を着ていて〝The 大和撫子〟といった大人っぽい女性の姿であった。ってか着物で飛び蹴りとかはないな。
「で、神様？」
「その呼び名はやめい、妾にも高靈神と言った美しい名前があるのでな」
「では、タカオカカミ様！」
「タカオカミノカミだ。馬鹿にしておるのか！」
「いえ滅相もございません！　タカオカ様！」
「……もう知らん」
涙目になる神様可愛い。
「すみません。俺、滑舌が悪い方でして、つい……」
「まぁ、確かに昔から言い辛いとは言われていたがの。もういいもん、タカオと略して呼ぶ事を許す！」
「ははぁ！　有り難き幸せでございます、タカオ様」
「お、おう！　そうかそうか苦しゅう無いぞ！　おほほほ～」
マジ神様ちょろすぎ可愛い。
「さて、本題なのですが、この神具のことなのですが、どうして失くしてしまったのですか？」
「私にも分からないのだ。夜は基本的に眠っておるのでな、気がついた頃には盗み出されておったわ」
「なるほど、ではタカオ様自身も神具の場所は分からないということなんですね」
「そうなのだ。この地にはもうないかもしれぬ、誰か一緒に探してくれる者はおらんのかの～」
上目遣いで隼人を見るタカオ。
「あぁ～!!　はいはい。協力させていただきますよ、この天城隼人が！」
これがハニートラップってやつなのだろうか。女って怖い！
「本当かの！　では、今日からと言いたいのだがもう日が暮れてしまうの」
日はいつの間にか傾き、空は朱色に染まっていた。
「そうですね。明日にでもまたここに来ます」
と隼人が言うと、タカオは何かを考えるそぶりを見せ、何か思いついたのか笑みをこぼしていた。
「隼人よ、そこの祠にある瓶を持てい」
祠の中には、蓋の付いた一本の綺麗な白い瓶があり、隼人が渡すと、タカオは滝の水をひとすくい瓶の中に入れ、何やら呪文のようなものを唱え始めた。
「これでよし。では隼人これを大事に持っておくのだぞ」
「これは一体なんなのですか？」
「御守りのようなものだ。大切に扱うのだぞ」「御守りですか！　神様の手渡しとかマジで効力ありそう！　ありがとうございます」
「なんの礼には及ばんぞ、協力してくれるものにこのぐらいしてもアマテラス様も何も言うまい」
満面の笑みのタカオ。本当に善意なんだろうと隼人はその「御守り」を受け取り鞄に入れる。
「では、またここに来させて、って俺はもうここに入っても良いのですよね？」
「当たり前じゃ、我が家に迎え入れたのだ。気にすることでない」
「ありがとうございます！　では失礼します」
と隼人は一礼し帰路につく。
「にしし、上手くいった。今の世の中どのようになっておるか楽しみじゃ

のぉ」

9

神社から戻り電車に乗り込んだ隼人は今日一日のことを振り返る。都城との妖怪に関わる話から神様との出会い。昨日までは至って普通の大学生をやっていたはずなのに、今日の出来事がまだどこか本当にあったことなのかと、夢ではないかと疑ってしまいそうであった。

地元の駅につき大都会の喧騒を抜け家の部屋に着くと流石にヘトヘトでベットに沈み込む。

「今日のことって夢なんかじゃないんだよな、ハハ」

「そうじゃ！　夢ではないぞ、おほほほ～」

「⁉」

一人のはずの部屋で、今日散々聞いた声が聞こえてきた。

「幻聴か。マジ疲れてるんだな、俺」

怖くて枕に顔をつっこみ耳を塞ぐ。

「我の声を幻聴扱いとはこの罰当たりが！」

隼人の背中にカカト落しが飛んでくる。

「ってなんでここにいるんですか⁉」

流石に無視しきれずベットから飛び起きる。

「与えた〝御守り〟で来たに決まっておろう」

「いやいやいや、御守りから神様出てきたとか普通じゃないですよ！決まってないです！」

「ありゃ、そんなもんかの？じゃが、これでいつでもそなたを守ってやれるからの、安心せい！」

はぁ～と隼人は長い溜め息をつく。神と人間の共同生活？が始まったのだった。

10

今日は土曜日。いつもなら大学も無く心休める日のはずだが、

「おい、隼人！　起きんか。妾は町を見てみたいのじゃが」

朝早くからこの我が侭姫、訂正して我が侭神の声が響き渡る。

「ん～まだ朝の八時じゃないですか。もう少し寝かせて下さいよ」

「嫌じゃ！　昨日は約束したではないか」

昨日はあの後、部屋を物色されたり家の中を見て回ったり（他の人には見えないようだ）と暴れ回ったこの神を鎮めるため、今日この土曜を生け贄にすると約束したのだった。

「分かりましたよ、じゃあ準備しますから待ってて下さい」

隼人は寝癖を直しながらベットから降り、出かける準備を始めた。

「やったー、では、賑わっている町の方を案内するがよいぞ」

「はいはい、仰せのままに」

一人騒ぐタカオと一緒にいる光景は、客観的に見れば羨ましいものなのだろうが。リア充ってこんな感じなのかな。と思いながらスマフォ確認する。昨日アドレス交換した都城からの何も分からなかったという定時連絡と、無事で良かったというメールに顔を綻ばせる。だがやはり旭からの連絡は無く心配でもう一度メールを送ってみる。

「まだかまだか？」とタカオに急かされながら家を出て繁華街へと向かう。繁華街に到着すると、タカオは目を輝かせながら色々な店の品物を見て回ったり、映画が見たいと言い出して見に行ったりと大はしゃぎであった。

「スゴかったの！　あの水晶のようなもので色んな物がみえるのかや？」

「あぁ、映写機のことか。はい、どのような風景であろうと映し出せますよ」

「人間共も捨てた物じゃないの。前に人間界を見て回った時とはエラい違いの」

「前っていつの話なんですか？」

「つい二百年ほど前じゃ、こんなに高い建物など建てられるようになったのじゃの」

普通に遊んでいたから忘れていたけど、何百年もこの神（ひと）は生きているのだと隼人は実感した。

「どうした渋い顔をして」

「いや、なんでもないです。ただ本当に神様なんだなと思って」

「まだ疑っていたのかや?」
「いえいえ、滅相もございませんで」
「ったく、神を何だと思って……お、おい、隼人！　あの可愛らしい蛇は一体なんだ!?」
タカオはゲームセンターにある蛇のぬいぐるみを指さして興奮しているようであった。
「ええっと、ここはゲームセンターって言って、お金を払ってこのぬいぐるみを取るんですよ」
「〝げーむせんたー〟か、この蛇は取れるのかや?」
「え、ええ。お金を払えば。欲しいんですか?」
「い、いや欲しくはない！　欲しくはないがどうしてもそちが妾に納めたいというのなら……」
「いえ、そんなことはないので行きま……」
と言いかけるとタカオは涙目の上目遣いをしている。
「そんな顔されちゃ断れないでしょ。あんまり上手くないんけどな」
隼人は渋々クレーンゲームにお金を入れる。
　結果、隼人は五千円ほど浪費して、最後絶対に取れる位置まで店員さんに持ってきてもらい見事ゲットした。
「くそ！　この蛇が俺の財布の半額持っていきやがった。」
と隼人は呟きつつ、
「はい、お納め下さい神様！」
「おほほほ～仕方ないの。貰ってやるか」
この後も上機嫌のタカオは散々貢がせていたそうな。

「今日は楽しかったの～隼人?」
「えぇ！　こんなにお金を使ったのは初めてってぐらい楽しかったですよ」
「おう、楽しかったのなら良かった、今度は書物がたくさんある店で見た〝遊園地〟なるものに行ってみたいの。おほほほ～」
この我が侭神には皮肉は通じないらしい。
「今日は妾の我が侭に付き合ってくれて悪かったの……感謝しておる」
その言葉を聞き隼人は目を丸くする。楽しかったのは事実で、二人でデートのように遊んだのは隼人自身も初めてのことであった。お金を使いすぎたことを後悔しているとはいえ、それ以上の「モノ」をこの神様から頂いたような気がする。
「いえいえ、このぐらいのことしかできませんで申し訳ないです」
「本当に感謝しておる。今日のことも、それに神具探しを手伝ってくれると言ってくれたことも」
タカオの顔はずっと赤く、目をそらして照れているようにも見えた。
「大好きな龍山市とタカオ様のためです。苦ではないですよ」
「御主は全く！　神をたばかるでない！」
タカオは更に顔を赤くしてどこか一人先へと行ってしまった。

11

　朝早くから来ていた繁華街の空も、日が傾き夕暮れになっていた。
「さて、そろそろ帰りますか。明日は神具を探しましょう」
そういって駅に差し掛かると電話が鳴る。
「お、都城からか」
電話に出ると、
「天城君！　今すぐ竜美池に神様と一緒に来てもらえる?」
「え、何かあったのか?」
「とりあえず早よ来て！」
そういうと都城は電話を切った。だが、声はとても慌てている様子で隼人は悪い胸騒ぎがした。
「なんだろ?何か分かったみたいなんで龍山市に今から行きます」
「うむ、妾も夜が近づいていて眠いがの、妾のことじゃ急ぐかの」
龍山市に到着する頃には辺りはまっ暗になっていた。
　スマフォで調べておいた竜美池へと向かう。着くまでに都城には何度も連絡を入れるのだが電話にでる事は無く、そうこうしているうちに竜美池に到着した。池には人影があり呼びかけてみる。後ろ姿は確かに都城なのだが、

「おーい！　都城いるのか？」
「うん！　こっちやでこっち」
返事が返って来たので隼人が都城に近づいてみると、後ろにいたタカオが前に出て制止する。
「どうやら、罠にはめられたようじゃぞ隼人よ」
都城に見えていた人影がゴムのようにウネウネとくねり別の人間の姿へと形を変える。
「力を失っても流石は高靈神ってことかしらね」
赤い着物に赤い傘を持った少女に姿を変え向かい合う。
「どうせスイシャクの眷属であろう？眷属ごときが妾をたばかれると思うな」
「今の貴方ではスイシャク様に敵うはずありません。ここはおとなしく残りの神具を渡すのが得策かと」
睨み合う二人。すると池の方から大きな声が響き渡る。
「アイラよ、水龍神を挑発するでない。お前などではあの欠片の力だけでやられてしまうわ」
「はい、スイシャク様。出過ぎた真似をいたしましたの」
池に波紋が広がったかと思うとゴゴゴと大きな音と共に大蛇が現れた。その大きさはクルマでもひと飲みにできそうな大きさであった。
「久しぶりだな、水龍神よ。女神の姿などやめて本来の姿をしてはどうだ？いやできないのであったな」
っくくくとスイシャクと呼ばれる大蛇は笑う。
「やはりお前の差し金か。妖怪風情では神具は触れぬはずじゃが。神具をどこへやった？」
「女を殺された人間が私に忠誠を誓ってな。っくくく、良い協力者を持ったものだ。」
隼人にはすぐさま旭のことだと分かった。
「おい！　スイシャクだったよな。旭をどこへやった！」
「最近の人間は元気が良いな。先ほど私に挑戦してきた陰陽師紛いの女といい、畏れを知らんな」
「都城の事か⁉」
「安心しろ人間。まだ二人とも殺してはおらぬ。利用できる物は利用するたちでな」
ばっと隼人の前にタカオが飛び出し、右腕が光ったかと思うとスイシャクに向けてビームなようなものを放つ。が、ビームを喰らったスイシャクには何の変化も無かった。
「隼人、今はこいつをどうにかすることに集中するのだ。今の妾では……」
タカオ弱気な表情をみせる。
「そうだよな、水龍神よ。お前も信仰されなくなって弱体化したようだな。二百年前の面影など微塵にも感じられんわ。っくくく」
「昔ならこんなやつすぐに黙らせる事もできたものを不甲斐ない」
「人は木々を伐採し、我ら妖怪もお主のような神さえも信じない時代になってしまった。お陰で封印が年々薄れて〝畏れ〟を集めることはできたわ。人間どもには感謝せにゃならんな。このままでは貴様は消滅してしまうかもな。っくくく」
「……くそ、どうすれば良いのだ」
絶望しているタカオの肩に手を置き隼人が叫ぶ。
「お前は何も分かっちゃいねえ！　今だってタカオ様のために毎日参拝してる人、境内を掃除する人だっている。俺もそうだ。田んぼや畑が育つために神社で雨乞いを祈願する人だって今でもいるんだ。神様っていうのは消えねえんだよ。人の心に生き続けるんだよ！　恐怖でしか存在できないお前とは違うんだよ！」
「人間風情が生意気な口をききよるわ」
隼人は左手でタカオの右手を握る。
「タカオ様。俺の信仰力だけじゃ足りねぇかもしんねぇ。でもこんな俺の、俺の力が支えになるなら使ってくれ」
手を握られて驚いた顔をしていたタカオだが、徐々に表情を変え、いつもの余裕に満ちた顔になる。
「あぁ！　隼人。お前の力があれば何も怖くない。一緒に封印式を張るぞ！」
再びタカオの右手が白く光る。さっきの倍、いや数十倍の光量が周りを

照らし出す。
「な、なんなのだ！　この力は。アイラ‼　こいつらを止めろ！」
「はい、スイシャクさ……動かない」
アイラの周りには結界のようなものが張られていた。
「やられっぱなしは性にあえへんからな！」
「都城！　無事だったのか」
「うん！　西田君も助けたし、こいつは抑えといたるから何も気にせんとそれぶっ放し！」
都城は札のようなものを振って笑顔で激励する。
「よし、隼人！　準備完了じゃ。いくぞ！」
「仰せのままに！　おぉぉぉぉ！」
重なった手をスイシャクの方へと向けると一面が昼のように明るくなるほどの龍の形をしたビームを放たれる。
「おのれぇぇ‼‼　またいずれか覚えておくが良いわっくくくくく‼」
辺り一面がまた暗く戻る頃にはスイシャクの姿は無く静寂が訪れる。
「終わったんだよな……」
「あぁ、終わったの」
二人は顔を合わせ、笑い合ったのだった。

12

後日談。旭が隠しておいた神具をタカオに返した後、謎の力で元通りの水晶状に魂神具は戻り、再びタカオの力は復活した。そして相当気に入ったのか滝の前の祠に例の蛇のぬいぐるみが鎮座するようになった。都城はあれから本当の神の封印術に敬服し「師匠」（タカオ公認）と呼び、日々許可を貰って禁足地の鳴神の滝で修行に明け暮れている。旭は、何故か元眷属のアイラと共に過ごしているらしい。
何があったというのか……事件の騒動も落ち着き、また龍山市は平和な日々に戻った。

俺、天城隼人は、今この我が侭神と〝遊園地〟に来ている。
「って、姿現せたんですか！　普通に‼」
「当たり前じゃ。神じゃじょ？出来ぬ事など無いわ！　おほほほ～」
「よ、よかった……この間の映画みたいに、実質一人で〝遊園地〟はきつかったんですよ」
「さぁ！　そんなことより早く！　書物に書いてあった〝じぇっとこーすたー〟なるものに乗ってみたいぞ！」
「はいはい、仰せのままに」
俺の人生、まだこの運命の我が侭女神の気まぐれに付き合わされそうです。

（完）